

# 地域と協同の 研究センターNEWS

2023年7月25日発行  
227号

## 20230603日本協同組合学会 第41回春季研究大会報告

実行委員長 安藤信雄

日本協同組合学会は、毎年春に研究大会、秋に全国大会を開催している。春の大会はフォーラム形式で、秋はシンポジウムと個別報告が行われる。この春の大会を名古屋で開催することが常任理事会から打診され、その後、数回の議論を重ねた。その中で学会大会での議題を地域のコミュニティで起きている新しい事象と、諸協同組合の地域活動の関係を、学会が学問的に考察することとし、そこから協同組合のアイデンティティを議論することとなった。

具体的には、現在、地域において進行している少子高齢化と人口減少によって、国家として構築してきた社会制度の機能が持続できない恐れがあり、この事態を受けて各地で起こっている地域市民の協同による助け合いを、協同組合がどのように対応しているのか、さらに今後していくことができるのかという点を議論することにある。その議論を通じて、韓国で行われたICA世界大会のテーマとなった協同組合のアイデンティティに関する議論をも受けるものとして、社会変容に対応しようとする「協同組合らしさ」を具体化していこうとすることとなった。

大会の進め方としては、今まで地域と協同の研究センターで議論され、東海交流フォーラムで報告と交流を繰り返してきた地域活動を帰納的に議論し「新しい市民社会への途」を共有すること、またその事例を演繹的に議論する理論を事前に共有しようという2部構成が導き出されてきた。

その議論を受けて準備の殆どを地域と協同の研究センターが担った。そのおかげで数年前から研究センターが続けてきた東海交流フォーラムで議論され報告されてきた市民活動の方々に登壇いただけることとなった。これは東海地域で長年の間、市民活動家と生協が試行錯誤の積み重ねで築き上げられてきた事例であり、その活動の細部にまで研究センターがフィールドワークによって調査してきたものである。今回、それを学会で学問的に議論するという画期的な企画となった。

研究大会当日は、5月末であるというのに、南方で発生した台風2号が日本本土南岸まで接近し海上を通過するという異常気象に見舞われ、梅雨前線を刺激した警報を伴う大雨により東海道新幹線は前日と当日

【2ページにつづく】

### 研究センター7月の活動

1日(土) 三河地域懇談会「豊橋生協会館へ 寄らまいかん」	14日(金) 尾張地域懇談会
2日(日) あいち子ども食堂ネットワーク幹事会	15日(土) 難民食料支援(仕分け・発送)
3日(月) 名城大学法学部「ボランティア入門」第13回 三重地域懇談会「仲組ふれあいサロン」三重県松阪市飯幸町訪問	17日(月) 名城大学法学部「ボランティア入門」第15回
4日(日) あいち在宅懇話会 2023 国際協同組合デー中央集会	19日(水) 2023 国際協同組合デー愛知記念行事
8日(土) 第20回東海交流フォーラム実行委員会・第1回理事会	22日(土) アジアボランティアネットワーク東海世話人会
9日(日) 多文化社会と協同組合懇談会	24日(月) あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク情報共有会議
10日(月) 名城大学法学部「ボランティア入門」第14回	25日(日) くらしと平和・憲法を守る実行委員会
12日(水) 協同組合等研究組織交流会	28日(金) JCAブロック別情報交換会・三河地域懇談会世話人会
	29日(土) 友愛協同セミナー

※ 各行事は新型コロナウイルス感染対策をとって実施しています。

目次	20230603日本協同組合学会 第41回春季研究大会報告	1	地域でウクライナ避難民を受け入れる	5
	日本協同組合学会 第41回春季研究大会を終えて	3	情報クリップ	6
	春季研究大会 エクスカーション 奥三河・協同のまちづくり 見学交流の報告	4	書籍紹介「食べものから学ぶ世界史」	8

## 【1ページからつづく】

午前中に東京-大阪間で不通となるというハプニングに見舞われた。全国からの学会参加者たちは、急遽、退避場所から遠隔会議システムZoomによって参加してくれた。このZoomシステムは、これまた歴史的な出来事であるコロナウイルスによるパンデミックの発生という事態に対応して普及してきたIT技術を学会員が使いこなしてきたものである。つまりコロナ禍で学会員がパソコンで会議に参加することにすでに慣れていたことが幸いしたといえるだろう。

### 何が論点になったか

向井忍氏(地域と協同の研究センター専務理事)より大会趣旨として、実践から市民協働の理論化をおこなうために自由に語ろうとの説明がなされた後、神田すみれ氏(地域と協同の研究センター・研究員)からは同質性は連帯を強める一方で異質の排除を生むという座長解題が示され、多様性を包摂する寛容なコミュニティとアソシエーションをどう作用させるのかと問うた。これを受けて第1部「協同組合のアイデンティティ」で、橋本吉広氏(友愛協同組合研究会)から「友愛(思想)とよりよいくらし」、大橋充人氏(多文化社会と協同組合懇談会)から「在日ムスリムにおける共同の取り組み」、小野澤康晴氏(サードセクター研究会)から「協同組合研究と経済学の関係性」として制度派経済学の解説も含めて発表された。

第2部では、鈴木稔彦氏(地域と協同の研究センター代表理事)より挨拶を受けた後、青木雅生氏(三重大学)より座長解題が示された。続いて清水孝子氏(岐阜県各務原市八木山地区社協)より「ささえあいの家」の活動について、平手マリ子氏(三重県桑名市みえ医療福祉生協)より「ガーデン大山田」の活動について、加藤久美子氏(JA愛知東女性部)より「やなマルシェ」の活動について、松原滋氏(コープぎふ飛騨支所)より「地域複合サロン」の活動について、上江洲恵子氏(愛知県高齢者生協)より「ケアセンターほみ」の活動について報告されてきた。

これらの活動報告へのコメントとして向井清史氏(名古屋市立大学名誉教授)より、JAがコミュニティに依存して地域共通の金融をメインにする方向に進み専業農家が離反した点や、逆に生協は企業化することでコミュニティから距離が出てきた。JAは専業農家をどう取り込むのか、また生協のこれからは特定の事業のみを担う企業的存在になるか、コミュニティの多面的活動を担う存在になるかの岐路に立っているのではないかと論点を示した。午前中に新幹線が不通となる中で駆けつけた松本典子氏(駒澤大学・日本NPO学会常務理事)より、午前と午後の報告には協同の2つの形があるのではないかと、一つは「ささえ合い」という協同、もう一つは協同組合が媒介となって形成される協同があるといえるのではないかと、とのコメントがあった。

### 大会議論の総括的な感想として

大会を総括できるほどの能力を私は持ち合わせていないが、本大会の感想として言えることは、日本でおきている少子高齢化、人口減少への転換の中で協同組合が今までの在り方から転換することを背景として生じた協同組合への期待が内在化されていたのではないかとことだろう。もう少し踏み込んで言うと、地域住民の期待に応えられなければ、日本の協同組合は急速に衰退してしまうだろうという危機感から生まれた議論だったのかもしれない。高度経済成長の中で拡大してきた日本の協同組合運動が、人口減少による市場の変化、少子高齢化による社会福祉制度の持続性への疑問視、老後生活を支えるコミュニティの未成熟、高齢化による農村地域での産業の疲弊と金融事業に支えられる農業協同組合の在り方は是非など、どれも従来の大量消費に支えられた経済の持続性への疑問と新しい社会の仕組みの方向性に対して、今後の協同組合運動が有効性を示せるのかということだろう。またコミュニティ活動との連携として期待される存在となりえるのだろうかということでもあり、同時に協同組合がそれらをどのように示せるのか、どう実践とするのかということも論点となっていたのではないかと。今回の学会はICA大会での協同組合アイデンティティの議論を以上のように受けたものとなったといえるだろう。

(あんど う のぶお)

## 日本協同組合学会 第 41 回春季研究大会を終えて

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

日本協同組合学会第 41 回春季研究大会が名古屋で開催されました。第一部は理論編、第二部は実践編として企画をし、準備を進めていきました。

第一部は「協同組合のアイデンティティ」への論点をテーマとして、地域と協同の研究センターの 2 つの研究会「サードセクター研究会」と「友愛セミナー」そして、「多文化社会と協同組合」の懇談会のメンバーからの報告でした。それぞれの研究会・懇談会の枠組みで事前の準備としての時間を持ちました。3 月 25 日の「友愛セミナー」では、橋本吉広さんの報告について参加者で意見交換をし、4 月 9 日の「多文化社会と協同組合懇談会」でも大橋充人さんの報告について、参加者で意見交換をしました。

4 月 23 日には、サードセクター研究会の枠組みで「第一部事前研究会」を開催しました。橋本吉広さん、大橋充人さん、小野澤康晴さんの 3 名の報告、コメンテーターの辻村英之さんからコメントをいただき、議論をしました。また、5 月にはそれぞれ個別の打ち合わせをして、当日を迎えました。

第二部は「東海から発信する新しい市民社会への途」をテーマとして、「ささえあいの家」の清水孝子さん、「ガーデン大山田」の平手マリ子さん、「やなマルシェ」の加藤久美子さん、「地域複合サロン」の松原滋さん、「ケアセンターほみ」の上江洲恵子さんに報告をいただきました。

当日を迎える前に、座長の青木雅生先生、コメンテーターの松本典子先生と、第二部の報告者の方たちの現場（三重県桑名市の大山田地区、岐阜県各務原市の八木山地区、愛知県新城市八名のやなマルシェ）を訪問し、現場で、そして往路で議論を重ねました。準備を進める中で、実際に協同の実践が行われている場を訪問して、実践する人たちと意見を交わす時間は、今協同組合学会のテーマである「(東海) 地域の実践から問いかける「協同組合らしさ」」を実践者と研究者が、地域を前に、双方の知見と思いを重ね合わせる時間でもありました。4 月 7 日には第二部の座長、報告者、コメンテーターで事前勉強会の場を持ち、5 名の実践報告の内容を確認、意見交換をする場を経て、学会当日を迎えました。

第一部の座長解題で、私は、同質性は連帯を強める一方で異質の排除を生むが、多様性を包摂する寛容なコミュニティとアソシエーションをどう作用させるのかと問い立てをしました。私たちは多様な側面を持ち、アイデンティティは 1 つではありません。私たち一人ひとりの中にある多様性を表現し、それらを重ね合わせる場と経験を積み重ねることが、多様性を包摂しながら連帯を強めることを可能にしていきます。今学会は、協同組合を実践する私たちがそのような経験を重ねることへのチャレンジだったのではないかと思います。このような経験の積み重ねが継続され、協同組合が多様性を包摂する寛容なコミュニティとアソシエーションが生まれる 1 つの示唆的な機会として継続されていくことを期待します。

参加された方からアンケートで寄せられた感想の一部をご紹介します。

<第一部について> 協同組合のアイデンティティをどのように問うのかは難しいところですが、それぞれが興味深い論点から提起してくださったと思います。もちろん、立場の違いなどもあるでしょうが、問題提起としては面白く聞かせていただきました。

<第二部について> 清水孝子さん、平手マリ子さん加藤久美子さん松原滋さん、上江州恵子さん、5 人の実践報告はどれも素晴らしかった。地域のたとえ一人であっても困りごとを見逃さないで、みんなで力を合わせて、助け合いの輪を拡げていく姿は感動的。共通しているのは支える側も支えられる側も固定的ではないことを前提に、フラットな関係づくりがされ、互いに心理的な負担が無い事、とてもいい関係づくりがされていることが、地域の協同を生み出している。

(かんだ すみれ)

## 日本協同組合学会春季研究大会 エクスカーション 奥三河・協同のまちづくり 見学交流の報告 報告：伊藤小友美（事務局）

6月4日、地域の実際の様子を見ていただこうと、エクスカーションが開催されました。金山駅（名古屋市）に朝8時10分集合という強行軍にもかかわらず、全国から35名（現地参加11名含む）の参加がありました。概要を報告します。

はじめに、JA 愛知東の代表理事組合長の海野文貴さんより歓迎の挨拶があり、JA 愛知東とコープあいちが、昨年総合提携書を更新し、「対等互惠」の言葉を加えたことが紹介されました。次に、ランチの準備で忙しい中、やなマルシェの活動紹介が代表の加藤久美子さんからありました。

### <報告1> 新城市の住民自治 前澤このみさんのお話

新城市では、2010年「新城市自治基本条例を考える市民会議」を発足させ、新城らしい自治基本条例制定をめざして活動を始めました。まちづくり大茶話会など、多くの意見を出し合う機会を持ち、2011年には「新城市自治基本条例検討会議」が始まりました。プレ市民総会を開催し、条例案を提出、2013年4月に自治基本条例と地域自治区とが同時に施行されました。

基本条例はできたらおしまいではなく、それを生かす仕組みづくりを続け、女性議会、若者議会、中学生議会などの取り組みが続いています。

2019年には福祉円卓会議を発足、「新城市福祉従事者がやりがいを持って働き続けることができるまちづくり条例」につながりました。10年を経て、女性議会に参加した女性による市民活動グループができたり、若者議会の経験者が市職員として活躍したり、ホンモノの市議会議員になったり、という動きが出ています。人口減少はつづきますが、世代のリレーができるまちをめざして、市民協働による住民自治の取り組みを続けます

※八木憲一郎さんからは、みかわ市民生協の時代からのJAとの連携や、ご自身が新城市10の自治区のうち2つの自治区を担当する自治振興事務所長を経験しての報告がありました。

### <報告2> 設楽町でのとりくみ 篠原豊郷さんのお話

名倉は無医地区です。障がい者相談支援員をしていた時に、生後に重度の障がいを持った梨瀬ちゃんに出会いました。梨瀬ちゃんのご家族の想いに寄り添い、地元保育園入所や名倉小学校への入学が実現するまで、先生方が受入に向けて努力してくださり、子どもや先生との交流で生き生きとした変化が梨瀬ちゃんに生まれてきました。「ふつうの子どもとして接した」という先生の言葉から、教育の本質とは何かということ学びました。

※梨瀬ちゃんのお母さん、後藤さんからは、地元名倉で育てたいという強い想いが語られました。時間をかけて遠くの特別支援学校へ行くより、地元の学校へ行きたいという想いに応えた多くの人の協力でそれが実現できたこと、そのことへの感謝の言葉が参加者のみなさんの心を打ちました。梨瀬ちゃんが入学した名倉小学校の当時の校長先生からのメッセージも、篠原さんから紹介されました。

### <報告3> いなぶ健康アカデミー 岩本里美さんのお話

豊田市の稲武地域は、人口減少のすすむ超高齢社会です。そこで地元への貢献を考えた理学療法士の永井雄太さんが利他の心を持つ2人（感染管理認定看護師の岩本里美さんと、言語聴覚士の和田浩成さん）によびかけて、いなぶ健康アカデミーが発足しました。病院は病気になるからの対応ですが、病気になる前の対応が重要です。活動2年目より新型コロナ感染が広がる中、専門性を活かした感染対策のパンフレットやポスターをつくり、ケーブルテレビやオンライン講座などに取り組んできました。医療専門職のボランティア団体としての存在意識を常に感じながら、行政や地域・企業と連携した活動の広がりをめざし、地域の方々の健康寿命を延ばしていきます。



3つの報告のあと、やなマルシェ手作りのおいしいカレーランチを食べながら懇談しました。やなマルシェの加藤さんからは、いつもどのように協同組合について語っているか報告があり、会場は大いに盛り上がりました。日本協同組合学会への参加者ともつながり、地域複合サロンの飛驒市、ささえあいの家の各務原市からも参加があり、豊かな実践交流の場になりました。

名古屋から新城へ向かうバスの中では、自己紹介を兼ねて前日の感想を交流し合いました。遠足気分童心にかえて楽しかったとはバスに乗った研究センター事務局の野田幸男さんの話です。車中で水害のキャンも集めて、新城市社会福祉協議会会長の前澤さんに贈呈しました。たいへん有意義なエクスカーションとなりました。ご参加、ご協力いただいたみなさまに感謝申し上げます。

（いとう こゆみ）

## 地域でウクライナ避難民を受け入れる

神田すみれ（地域と協同の研究センター 研究員）

出入国管理庁によると、ウクライナ避難民入国者数は、7 月 12 日現在 2,465 人、東海地域では、愛知県は 110 人、岐阜県は 14 人、三重県は 1 人です。愛知の避難者数は数名の変動がありますが、岐阜と三重の避難者数は変動がありません。昨年、戦争が始まった直後 2022 年 3 月、全国の避難民入国者数は 351 人、4 月は 471 人でした。徐々に入国者数は減り、現在、2023 年 5 月は 30 人、6 月は 16 人となっています。このように、時間の経過とともに入国者数は減っています。2022 年 3 月 4 月の時点では 2 週間で発行されていた日本のビザ（査証）が、現在は申請をしてから 2 ヶ月以上かかるようになってきているという話も聞いています。

戦争が長期化し、避難民の入国状況、日本政府や民間の受入れ、支援状況は変化しています。入国後 1 年以上が経過する避難民の支援は、日本語学習支援、就労定着支援のような定住支援に変化しつつあります。よりご自身の望む生活に近づくため、国内転居を望む人も出てきています。

7 月に入り、ウクライナから避難している方たちを地域で迎えよう！と自治会の集会所を借りてウェルカムパーティーを企画、開催しました。当初はその地域に避難しているウクライナの方たちと地域住民の皆さんとの小さな集まりを考えていましたが、企画から 2 週間、あっという間につながりをつなぐと呼び、地域の自治会の方たち、日本語教室の受講生やサポーター、国際交流協会の職員や交流館の職員の方たち、大学の先生たち、そしてあいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワークのメンバーも加わって、途中、草取りをしていたという地域のかたも「賑やかだね」と覗きに来て、そのまま参加していただき、合わせて 50 人近い地域の人たちで、ウクライナの皆さんを歓迎する時間になりました。

「住んでいる地域に日本語教室があるとは知らなかった！」と、早速次週から日本語教室に通う約束が交わされたり、ウクライナ避難民の方と職場が同じという住民からは「職場で見かけた！」と会話が始めたり、「ウクライナ語でこれは何て言うの？」と即席ウクライナ語教室が始まりました。途中、お誕生日をお祝いするサプライズイベントもあり、賑やかでとても楽しい時間でした。

すでにつながりができている地域では、新しい住民を歓迎する場を作ろうと考えた時、すぐに地域の人たちが集まり、このような場をつくるのが可能なのだと感動しました。もちろんこのような地域のつながりは、たくさんの苦労や大変なことも経験しながら住民が作り上げてきたものでしょう。この歓迎パーティーをきっかけに、ウクライナの避難民の方たちが、地域の見守りがある中で、安心して生活ができるようになるようにと思います。

研究センターでは、2021 年から、名古屋難民支援室、アジアボランティアネットワーク東海と共に、難民食料支援を行っており、6 月に開催した「学び語り合う会」、7 月に開催した食料発送作業には、地域に暮らす難民の方たちもたくさん参加してくださいました。その中で、ある難民の方が「地域の人たちと関係を築きたい」、「自分も住民として地域に貢献したい」とおっしゃっていました。同じ地域に暮らす住民として、共に地域を作り、支え合う関係性ができるようになるには、どのようにしたらいいのでしょうか。

この 7 月にはアフガニスタン退避者 114 人が難民に認定されました。これは、過去最大規模での難民の一斉認定です。昨年 2022 年には 1 年間でこれまでで最も多い 202 人が難民認定されており、日本の難民の受け入れに変化がもたらされるのではないかと期待をしています。地域社会、私たち市民の意識にもよい変化が生まれつつあると感じながら、地域で一緒に過ごす時間が増え、それぞれが役割を担い、地域を共につくる関係ができていく社会を実現していきたいと思います。

（かんだ すみれ）

# 情報クリップ



**co-opnavi** 2023. 7 No. 854  
**地域や他団体と連携して進める生協の被災地支援**  
 日本生活協同組合連合会 2023 年 7 月 A4 判 32 頁 367 円 (消費税込)

- <私たちの「この一枚」>  
 とやま生協 創立1周年を迎えました  
 とやま生協 組織ネットワーク部  
 広報グループマネージャー 横堀真美
- 特集  
**地域や他団体と連携して進める生協の被災地支援**  
 <今日も笑顔のコープさん 生協の仲間のお仕事拝見>  
 パルシステム静岡
- <想いをかたちに コープ商品>  
 CO・OPえびと彩り野菜のアヒージョ
- <生協大好きママコブ山さんの 教えて!CO・OP商品>  
 CO・OPアイスモナカ
- <CO・OPの役立ち♪家庭用品>  
 CO・OPくっつかないホイル
- <組合員に支持される店づくり・売場づくり>  
 コープこうべ
- <日本全国 宅配現場におじゃまします!>  
 みやぎ生協・コープふくしま
- <明日の暮らし ささえあうCO・OP共済>  
 コープやまぐち
- <腰痛予防のための筋肉快適体操>  
 監修: 順天堂大学大学院 先任准教授 谷本道哉さん
- <この人に聴きたい>  
 (株) おてつたび代表取締役 CEO 永岡里菜さん
- <ほっとnavi> コープみやざき / パルシステム東京

**生活協同組合研究** 2023. 7 VOL. 570  
**防災・減災に向けて今からできること, すべきことを考える**  
 公益財団法人 生協総合研究所 2023 年 7 月 B5 判 72 頁 定価 550 円 (消費税込)

- 巻頭言  
 「関東大震災から 100 年」  
 防災・減災の意識と「備え」への取り組みを  
 社会全体で日常生活に定着させたい 稲村浩史
- 特集 **防災・減災に向けて今から  
 できること, すべきことを考える**
- 地震災害に備えるための防災教育 平田 直  
 これからの巨大災害にどう備えるか?  
 個々人のイメージネーションを! 西川 智  
 災害から命を守る「タイムライン防災」と  
 「コミュニティ防災会議」を上げよう 松尾一郎  
 人が集まり地域のつながりを生む防災訓練  
 —イザ!カエルキャラバン!— 石田有香  
 生協における防災・減災の取り組み事例  
 前田昌宏 ・ 葛 直宏  
 こくみん共済coopにおける防災・減災の取り組みについて  
 こくみん共済coop
- 住宅避難を想定したホームサバイバルトライアルの勧め  
 —各自の家庭に電気・水道・ガスを遮断した状態を  
 作り出し「疑似被災体験」に挑戦する— 玉田太郎
- 新しい防災教育  
 「被災したあなたを助けるお金と暮らしの話」のすすめ 岡本 正
- 国際協同組合運動史 (第16回)  
 国際協同組合同盟 (ICA)  
 1927 年第 12 回 ストックホルム大会① 鈴木 岳
- 本誌特集を読んで (2023・5) 高橋弘幸・香西 幸
- 公開研究会「ワーカーズ・コレクティブの現在地」7/10
- 生協総研賞「第21回助成事業」の応募要領 (抄)
- 第32回全国研究会 (2023年10月28日)開催予告

**文化連情報** 2023. 7 No. 544  
**会員の協同活動による廉価購入と医療の質向上の実現を**  
 日本文化厚生農業協同組合連合会 2023 年 6 月 B5 判 80 頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 \* 注

- 農協組合長インタビュー (88)  
 地域との交流で都市農業への理解を深める  
 今野博之
- 「共同購入ビジョン—非営利・参画の構想」  
 Ver.2 がスタート  
 —会員の協同活動による廉価購入と  
 医療の質向上の実現を 佐治 実

**院長インタビュー (343)**

新築移転で、地域に不可欠な  
オンリーワンの病院をめざす  
一人ひとりの幸せと地域の幸せを  
ともに生み出す「増進型地域福祉」(下)  
朝倉美江

—第 24 回経営研報告(誌上再構成)—

厳しい偏在の中で医師確保の先進的实践に学ぶ  
協同精神のリレー (4)

職場は社会の学校  
伊藤澄一  
変わる日本のまちづくり (37)  
NPO 法人ゆめみ～るの地域食堂から  
地域課題解決への展開(北海道登別市) (1)  
杉岡直人・畠山明子

**国民が安全に暮らせる社会の構築 (16)**

公的支援ではない自分たちの事業で経済的自立を  
—社会的協同組合ノヌメギ 友岡有希  
ドイツの対 COVID-19 戦略  
病院改革 パンデミックの終了で重症化する病院  
吉田恵子

**多様な福祉レジームと海外人材 (62)**

東アジアの「儒教国家」と福祉政策  
安里和晃

**臨床倫理メディエーション (65)**

ハビトゥスとは何か  
中西淑美

**全国統一献立**

長野県の郷土料理 キムタクごはん 永友由美子

**アフガニスタンから見た世界と日本 (38)**

政治と人間の尊厳重視の課題  
レシャード カレド

**デンマーク & 世界の地域居住 (168)**

『地域をひとつの大きな家族に』を目指す  
「ぐるんとびー」② (神奈川県藤沢市)  
松岡洋子

**熱帯の自然誌 (88) 家畜とは**

安間繁樹  
◆第 62 回農村医学夏季大学講座開催のお知らせ  
□書籍紹介 医学史の散歩道 江戸のお医者さん  
▼はい!!文化連です 業務推進部 業務 2 課

**にじ 2023 夏号 No. 684**  
**農業協同組合と事業～今日的有効性を問う～**  
一般社団法人日本協同組合連携機構 2023 年 B5 判 86 頁 1600 円 (税込)

**オピニオン**

○合理性の本質と市場の価値 佐藤 渉  
(業務執行理事、連携業務担当常務補佐)

○総合性と職能性について考える 小寺 収  
(兵庫県農業協同組合中央会 常務理事)

**特集企画**

**農業協同組合と事業 ～今日的有効性を問う～**

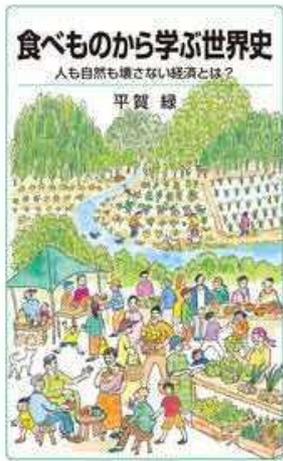
- 特集解題 小山良太 (福島大学 教授)
- 農協における営農経済事業の展開と今日的課題  
—販売事業を中心として—  
板橋 衛 (北海道大学 教授)
- 昭和・平成・令和、日本型総合農協史  
—「制度としての農協」再論—  
玉真之介 (帝京大学 特任教授)
- 県域合併時代の総合農協の論点に関する一考察  
小林 元 (日本協同組合連携機構 主席研究員)
- 農協法改正をめぐる県域経済組織の自己改革  
—ホクレンを事例として—  
藤田久雄 (北海道大学 研究員)
- 農協の事業方式の優位性を考える  
柴垣裕司 (静岡大学 准教授)

- 農業協同組合の軌跡と事業についての一考察  
菅野孝志 (全国農業協同組合中央会 副会長)  
[連載] 協同組織金融と地域振興
- 連載解題 小関隆志 (明治大学 教授)
- 「希望のまち」と「共助の金融」がめざすもの  
山口郁子 (全国労金協会 政策調査部長)  
[書評] 岸本聡子著  
『地域主権という希望—欧州から杉並へ、  
恐れぬ自治体の挑戦』2023 年 (大月書店)  
田中夏子 (農・協同組合研究者)
- [協同の広場]  
○協同組合間連携に係る企画・推進/教育・研究など  
編集後記 西井賢吾  
(日本協同組合連携機構 主任研究員)

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(❖)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介

井貝順子会員からの書籍紹介



食べものから学ぶ世界史

人も自然も壊さない経済とは 平賀緑著 (岩波ジュニア新書)

出版社:岩波書店 発売:2021年7月 定価 820円+税 頁数:196ページ

井貝順子会員からの紹介

文化連情報に、「食から考える現代資本主義社会」という連載があり、読んでみたら、ものすごく面白くて、筆者の平賀緑さんの本を探したらこの本に出会いました。小中学生から大人世代まで、幅広く読める入門新書、岩波ジュニア新書です。砂糖や小麦粉など身近な食べものから「資本主義」を解き明かす!産業革命,世界恐慌,戦争,そしてグローバリゼーションと「金融化」まで,食べものを「商品」に変えた経済の歴史を紹介. 気候危機とパンデミックを生き延びる「経済済民」を考え直すために,食べ物「商品」になってしまうことの意味とは,地球規模で数百年かけて誰が何を求めそれを実現するために何が行われてその結果どうなったか,その連続の先に作られた今の目の前にある生活. それを知ることによって私たちは未

来を選ぶヒントを得る。自然の動植物をとって食べていた時代から、食べものは次第に商品化して、ついには投機の対象になった。小麦やトウモロコシ、大豆、砂糖などの歴史をたどることで資本主義の変遷を浮き彫りにする。米麦は1反(10アール)からの収量は数百キロだが、ジャガイモやサツマイモは約2トンとれる。なのに穀類が重視されたのは、長期間保存でき富の蓄積に都合がよいからだ。課税して支配するため穀物は便利だった。イモは地中に育つのでどれだけ収穫できるか見えにくい。それらの穀物が「商品化」の主体となった。

1960年代の「緑の革命」は、生産性が高いハイブリッド種子と化学肥料、農薬によって進められた。裕福な農家は収穫を増やし、穀物価格を押し下げ、貧しい農家を破産や借金漬けに追い込んだ。『それまで貧しいながらも自給自足的な農の営みによって家族を養っていたメキシコの農民が「緑の革命」によって借金まみれになり生活できなくなったエピソード』が衝撃的です。資源も人も他国から勝手に奪って、自国を発展させた『北』であるヨーロッパとアメリカ。彼らが『発展途上国』(=南)を作った。『北』が経済成長するために『南』をこき使い、戦後には援助と称して『南』の農家を廃業に追い込み、その結果、現在のような、作っているのに食べられない、貧困と飢餓に苦しむ状況を生み出した。なんで、『北』の傲慢に『南』が従わなきゃいけないんだろう。緑の革命って、ものすごく肯定的に学んだ覚えがあります。岩波ジュニア新書、10代で読みたかった・・・

アフリカのことわざが最後にありました。生協の役割は、小さな人たちを手助けすることだと感じました。

もし たくさん小さな人たちが あちらこちらの小さな場所で  
それぞれの小さな取り組みを始めれば きっと世界を変えることができるだろう

研究センター8月の予定

- 3日(木) 第2回協同の未来塾
- 4日(金) 第83回生協の(未来の)あり方研究会
- 5日(土) 第1回共同購入事業マイスターコース
- 6日(日) あいち子ども食堂ネットワーク役員幹事会
- 7日(月) 第3回常任理事会
- 8日(火) 協同組合等研究組織交流会
- 9日(水) 愛知の協同組合協同連絡会(幹事会)
- 17日(木) あいち在宅福祉サービス事業者懇談会世話人会
- 19日(土) 多文化社会と協同組合懇談会(保見団地視察)
- 20日(日) サードセクター研究会(経済学・経営学部会)
- 21日(月) あいなごやウクライナ避難者支援ネットワーク・情報共有会議  
岐阜地域懇談会世話人会(ささえあいの家訪問)
- 22日(火) 尾張地域懇談会世話人会
- 26日(土) 第2回共同購入事業マイスターコース
- 29日(火) 研究フォーラム地域福祉をささえる市民協同世話人会

<p>地域と協同の研究センター Facebook 下記QRコードでご覧ください。 Facebook QRコード</p> 	<p>地域と協同の研究センター ホームページ 下記QRコードでご覧ください。 ホームページ QRコード</p> 
--	---

※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。参加の前にホームページ等でご確認ください。